



日本契情始

13
1549
1



月本銀紙帳
四之三



遠3
A.394
/

13
1549
1-4
88

1549
1

1334
1-8

春 城 無 處 不 飛 花 雪 色

東 風 雨 柳 斜 日 斜

序



異國の李延年の妹の良女容と自憐
して弄うさむる詞より傾城といふ神を
あつる良女は女より神よりなるなり。我朝
よしてあつる情のゆゑのつゝ花女と愛情
やのみださるるをひかへた怪し男より自
ら。鉄骨も良人の媚くさるるまゝ人の
ねをいをねて傾城とらふその神は是

遊の面白き酒もどき遊錫つ。時々千歳おま
 とし白拍子ね。若裸解の音。後めたり様より。
 今に其流をみる女。阿母一廓と接も夕
 全道とみらるの由。て来る法分と現く藝情
 乃嬉と看板く。相言とる而也

千時栄ゆ

作者 自笑

元禄三月

作者 其磧



日本契情始 一之巻

目録

第一 祝言の盃持あつて細く分刻

湯儀更の上作也

研磨のよき紙を中

あやうき物といふ

麻子ね嫁入小神

いふ物で紙と紙を

一うて見せる所の状

第二

横車押付業より身取妻の志のよ

心の中を言く意とかけたる 執心

耳ことつひゆあつゝ是見の忠言

家のこゝろに思ふと身にしづむ物事

第三

女まが終の樂夜に舞け日記老

ことごとし男に謝りぬれ付世や

高座借りけ高笑祇のまゝ八

武士と極心の鏡見たりない云分



一 祝言の盃持あつゝ細く分別

天竺といぬ是ち子の嫁は林大座といぬ出まの后腹叔

と祝ひ我物といぬ後後のとよといぬ玉簾のまゝと歌と玉は

とつゝあつゝと仮し傳女のすゝことなり玉袴よりあつゝばさ

なれば由縁もあるをいよつて忠信の素成 洞伏のあふ

けしめ肝膽とらでたのりりい妖狐み体とらるち幣帛

とあつゝりともがやのその井よりけり海はぬ 越て下ゆふ

堂原のまゝあつゝれす 進まるとあやまらんよつて 三浦のあ

ま孝と経のあ流まよと 討たにつらといれらんあ 備物と

あつゝりてあつゝりあつゝりまよとまよつて物とてとらん 妖

狐と返流すすふあつゝりあつゝりまよとまよつて物とてとらん 妖

狐と返流すすふあつゝりあつゝりまよとまよつて物とてとらん 妖

一巻目本



小瓶の類
立上り丸いび



一巻 終

三



